

7月2日川内1号機が営業運転

使用前官庁検査を一回でパス



今年2月ヘッダー揚げから
工事が本格化した

〔川内＝7月2日〕47年10月から建設工事を進めてきた鹿児島県川内市港町字唐山の九州電力川内発電所第1期（出力50万KW）が完成し、夏期の電力需要ピークに先がけて、7月2日営業運転に入った。

当社は、ボイラを石川島播磨重工業、タービンを三菱重工業高砂製作所、電気計装を三菱電機から、また二次発注として重油受入装置を九州電力、3万トンタンク（計装を含む）2基を石川島播磨重工業、その他付属設備をメーカーから一括受注し、47年5月から先行工事として工用電源設備に着手、同年10月には建設所を開設し工事が本格化した。以後、48年2月にヘッダー揚げ、7月に一次系水圧、9月に通電、11月に二次系水圧、49年1月に火入れ、2月に通気、3月に初併列と、大規模火力の建設としては、記録的なスピードで工程を消化し、このたびの営業運転に入ったもの。

この運開に先立ち、通産省検査官による使用前検査が行われた。6月29日に電気関係耐圧テスト、6月30日に安全弁テスト、総合インターロックテスト、密封油保護装置テスト、7月1日に調速機テスト、四分の四負荷遮断テスト、そして最終日7月2日に公害関係測定テスト、負荷テストなど関係試験が繰返されたが、一カ所の不良もなく、同日16時すべてを終了した。

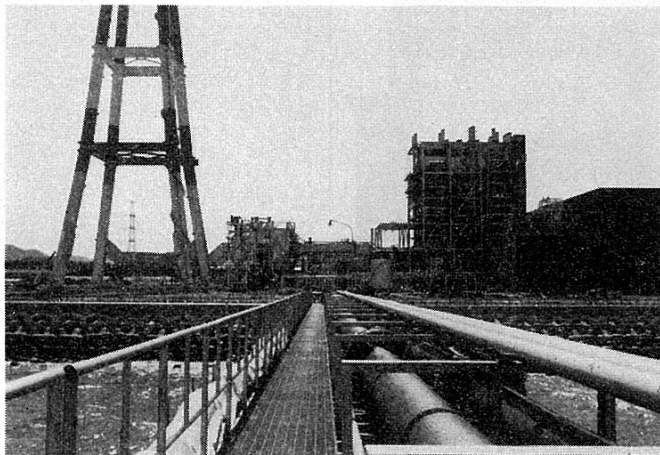
この運転開始によって、唐津3号機につづき九州電力2番目の単基容量50万KW発電所の完成となり、南九州初の大規模電源が誕生した。

なお、発電所設備の概要は次のとおり。

- 汽缶 放射再熱式貫流ボイラ、使用燃料重油および原油
- 汽機 反動串型四流排気式再熱復水型タービン、定格出力50万KW
- 発電機 横置円筒回転界磁型同期発電機、出力55万6,000KVA、電圧1万8,000V

横置円筒回転界磁型同期発電機、出力55万6,000KVA、電圧1万8,000V

- 主変圧器 屋外用防音室構造冷却器別置型、容量54万KVA
- 集塵装置 電気式集塵器
- 預油設備 6万KL2基（預油タンク）、5千KL1基（低硫黄重油タンク）
- 煙突 鋼板製集合型200メートル



営業運転を開始した川内1号機全景

当社保修体制に入る 事務所も移転

営業運転開始と同時に、発電所建設を担当してきた当社川内建設所は廃止となり、7月3日付で川内事業所が設置され修体制に入った。事業所長には、引き続き速水所長が発令された。

また、事業所の設置にともなって事務所も移転が行われた。

移転先は、発電所に一段と近接し背後は松林に囲まれた広さ1,518平

方メートルの敷地で、ここに事務所をはじめ倉庫、車庫が設置されている。事務所は、解体した松風寮1棟の材料が再利用され、軽鋼骨プレハブ構造の2階建。1階は事務室、会議室、従業員控室が設けられ、2階は協力業者の詰所となっている。また、敷地内の空地は、20台収容の駐車場に利用される。

三島 7月17日に火入れ

〔三島＝7月17日〕愛媛県伊予三島市にある大王製紙三島工場の自家用発電設備増設工事は、急ピッチで進み、7月17日ボイラ火入れが行われた。このあとすぐ、8月1日にター

ビンへの通気が控えている。この火入れ後通気までの2週間に、ボイラでは安全弁テストをはじめ総仕上げ、タービンでは潤滑油によるフラッシングが行われる。



発電所管理区域内に入立って

第5回原子力勉強会

燃料入荷の発電所内部を視察

〔本店＝7月17日〕当社は、原子力に関する組合との勉強会の5回目として、さる7月17日九州電力玄海発電所を視察した。

玄海発電所では、据付が完了した各種機器の試運転や性能試験が行われ、10月には燃料装荷、11月には臨界に達する予定で、工事も最終段階にきている。これを受けて、6月にウラン燃料の第1便が到着、構内には管理区域が設定されている。

これらの状況を視察するため、温徳機能テストを控えた7月17日、組合幹部と合同で発電所内部を見学し勉強会を行った。

組合から秦藤正本部書記長をはじめ田中光、林孝充、村上宗章、吉福信義、小崎陽、古林誠也、石原信一、後藤勇の各氏が出席、会社から東総務部長、山崎原子力課長、薄務課長、渡辺原子力課副長が出席した。

ウラン燃料の一部入荷が行われた発電所内部について、①原子炉格納容器内の作業環境状況、②原子炉補助建家内の作業環境状況、③管理区域内の立入手続きおよび立入実施体験、④タービン建家内の作業環境状況、など久富玄海建設所長の案内で見学した。

現場視察後、事務所控室で参加者全員による懇談会に移った。実際に見てきた作業環境について、質疑応答があった。つづいて、原子力修業務を担当するにあたっての当社の基本的な姿勢について、活発な意見交換があった。

組合との原子力勉強会は、このたびの第5回で、原子力基礎知識の理解を目的とした第1段階を終った。今後、当社の放射線作業管理体制（含、個人被ばく管理）について検討が行われる。

昇給、昇格など必ず取りかえすことができます。終極には、同僚と同じレベルに到達できるものです。あせらずに頑張らなさい』

と、凡人のサラリーマンの心境を見抜いたかのように、懇々と注意してくれました。

当時、私はかなり元気になっていましたので、出勤せねばなるまいか、しかし内心不安もあって迷ってました。また、同じ職場の先輩から早く出勤した方が将来のためよいぞなど言われ、不安にかられながら迷い悩んでいました。しかし、T専務さんのご忠言をじっくり噛み締め、何日間も考えました。1～2ヵ月早く出勤して、もし再発したらもうおしまいだ。それよりも俗念を払拭して徹底的に療養しようと決心し、いわば達観したということだったでしょう。

自分のご子息のことをも考えてのことでした。『菅原さん、あなたはまだ若い。病氣回復にあせってはなりません。サラリーマンである以上、長い療養生活中、会社を休まねばならない。その間、昇給、昇格も遅れましょう。そんなことに気を使っちゃいけません。気長に療養することです。健康な体になれば、長い人生のうちに、

それから、さらに半年程療養生活を続けたのであります。そのおかげで、退院後今日まで約40年間再発もなく、現在のように至極元気で働いてこれました。

この幸せを、ひとりで噛み締め感謝しているのであります。私はやはりT専務さんのご忠言を素直に受けとめ、精一杯療養を続けたことがよかったと思っております。私は若さに乗じてがむしゃらに前進せず、一歩後退してさらに前進したのだと思っています。

私どもの人生の中でも、また会社の仕事でも、目先のことばかりにこだわらずに、他人の忠言や、またどんなやかましい注意でも、一応は素直に受けとめ反省しながら、前進する必要があると思っております。「毛蟲の前進」を私どもの生活の中で、味って行くべきであるまいかと思っております。これが私のみなさんに対する忠言となれば幸であります。

(49年7月)

随想 先輩のご忠言

菅原 四郎 治

へん 嫌悪されたのであります。私はサラリーマンになったばかりで、奈落の底におちこんだような気持ちで悲観したものでした。そうした病人の悩みは、知る人ぞ知るとも言いましょうか、人生が真暗になったような気持ちで、精神的にずいぶん悩みました。

医学の進歩した現代から考えますと、全くの昔物語のようなものでしょう。当時は特効薬とてなく、自然の力で直すという

ことで、もっぱら安静、節制、栄養、新鮮な空気と言った、いわば自然療養法の4原則を忠実に実行するより術がなかったのであります。

先輩や他人のご忠言にはよく耳を傾けるべきだと、私は年輪を重ねるごとにつづく思うのであります。

忠言という言葉には、現代の若い人々には堅苦しい感じを持たれるかも知れないが、私は決してそうは思っておりません。ひらたく申せば、人間社会で私ども人間が、お互の幸せのため、また正しく立派な仕事をすすめるために、その方向を教えてくださいと忠言と言えまいか。

私は青年時代に、先輩から病氣療養の心がまえについての忠言を頂戴したことがあり、私の生涯を通じて忘れ得ない有難いお言葉と私の胸に秘めてまいりました。

ご参考になるかどうかかわかりませんが、ご披露してみたいと思いません。私は20才代の若い時代に、肺結核にかかり1ヵ年余療養生活を過したことがあります。当時、肺結核は伝染する病だ、そして不治の病とされ、世間一般にはたい